AFC Forum フォーラム

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

2

2016

特集 森林・林業の新時代が来る

AFC Forum フォーラム 2
Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers
2016

撮影：佐藤 尚
新潟県南魚沼市
2013年冬撮影

里地の杉林

■杉林の前面に雪に埋もれた田んぼが広がる。冷たく凛とした空気が張り詰める中、朝の光が差し込んだ■

特　集

森林・林業の新時代が来る

3　持続可能な林業と国産材利用の推進
宇野 聡夫
木材資源が充実し主伐の増加が見込まれる中、一部の民有林では再造林が行われていない。持続可能な林業経営の確立に向けた取り組みとは

7　自伐型林業が新しい担い手をつくる
興梠 克久
多様化し存在感が高まっている自伐型林業に焦点を当て、今後の林業担い手像の再構成を試みよう

11　林業経営の担い手は緑の雇用策から
奥山 洋一郎
新たな林業労働者を雇用し山村地域の活性化を図るため、2003年に導入された「緑の雇用」事業の課題を確認し、林業のこれからの姿を描く

情報戦略レポート

15　安全、おいしさ、見た目などの品質面で国産支持
—2015年度上半期 消費者動向調査—

経営紹介

経営紹介
23　株式会社御子神畜産／千葉県
御子神 正義
2度にわたる経営危機を乗り越えて、独自に開発した飼育データベースを武器に、堅実な経営で順調に利益を上げる

変革は人にあり
27　丸和林業株式会社／高知県
北岡 幸一
製紙会社向けの木材チップ生産を主力とする国内最大の木材チップメーカー。「1本の木も無駄なく有効に活用する」という若手経営者の経営手法を探る

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

シリーズ・その他

観天望気
持続可能な森林・林業へ　酒井 秀夫 …… 2

農と食の邂逅
大田原市森林組合／栃木県
齋藤 朱里
青山 浩子(文)　河野 千年(撮影) …… 19

フォーラムエッセイ
パーティーの主役たち　西口 彰子 …… 22

主張・多論百出
日本産・原木乾しいたけをすすめる会
小川 武廣 …… 25

耳よりな話 167
画期的な閉鎖型苗生産システム　吉岡 宏 …… 30

まちづくりむらづくり
農山村の暮らしに学ぶ地域づくりのための人材育成
地域に入る作法学び、卒塾生が歩み出す
愛知県豊田市
中川 恵子 …… 31

書　評
山下 惣一 著『小農救国論』
宇根 豊 …… 34

インフォメーション
名古屋市内で東海ブロックの交流会を開催
東海北陸地区統轄 …… 35
マイナンバーをテーマに三事業合同交流会を開催
水戸支店 …… 35
「広島発！ 企業の街コン」を開催　広島支店 …… 35
近畿管内の林業関係者による友の会を開催
京都支店 …… 35
衛生・品質管理向上をお考えの食品製造・加工業者の皆さまへ …… 36

みんなの広場・編集後記 …… 37

ご案内
第9回アグリフードEXPO大阪2016 …… 38

観天望気

持続可能な森林・林業へ

日本はさまざまな顔を持っています。稲作国家であると同時に森林国家でもあり、日本の国土の四分の一（二八％）を人工林が占めているという一面があります。この割合は二位のフィンランド（一九％）、三位のドイツ（一五％）を抑えて世界一で、当分は破られないでしょう。しかも人工林の主要樹種であるスギ、ヒノキは、それぞれ特有の優れた性質があり、日本特産です。スギ、ヒノキの違いをまだよく知らない外国の方にも、いずれその良さが知れ渡り、和風建築が海外でもてはやされるようになって、外貨を稼ぐようになればと思います。

この人工林は、焦土と化した戦後日本の山野に祖先が残してくれた宝です。現在、その大半はいつ主伐してもよい状況にあります。林業は成長産業と位置付けされ、地域創生の一翼として期待されていますが、そのためには森林の資産価値を今以上に上げていかなければなりません。手入れ不足で将来の価値の上昇が見込めない林分は皆伐してリセットし、優良林分は国内外を含めた優良材の需要開拓とともに、択伐林に誘導するなどの取り組みも必要です。

日本は人口減社会を迎え、山村や木材需要にもその波が押し寄せています。森林や山村、林業を魅力あるものにするにはどうしたらよいでしょうか。林業関係者は今まで営々として山に道をつくり、インフラを整備してきました。路網整備はまだ十分とは言えませんが、道づくりが可能なところは路網と車両系機械を組み合わせた林業機械化により、道づくりが容易でないところは安全なところを選んで設計された林道と架線系機械を組み合わせた集材体系によって、林道端までのコスト低減と集材における作業の軽減ならば、欧米に負けないところまできています。あとは川上と川下がお互い情報交換をしながら、需要家に向けて土場や大量輸送の工夫をし、安定供給を果たすだけです。

コスト低減と木材の付加価値化で雇用と収入の安定を図り、林業の産業化と魅力ある山村の実現に向けて、知恵を出し合っていきましょう。

東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
酒井 秀夫

さかい ひでお
1952年茨城県生まれ。東京大学農学部卒業。東京大学農学部助手、宇都宮大学農学部助教授、東京大学農学部助教授などを経て、現在に至る。専門は森林利用学。著書に『作業道ー理論と環境保全機能』『林業生産技術ゼミナールー伐出・路網からサプライチェーンまで』など。

のこぎりとはしごを抱えて
祖父が山に入る姿を
子どもの頃によく見かけた
同じ林業の道を歩む
祖父の枝打ちは見事です

農と食の邂逅

齋藤 朱里さん
栃木県大田原市
大田原市森林組合 事業課 技師補

木材自由化の一九六四年以降、日本の林業は退潮し、山の荒廃が進む。今、環境保全の観点から世界的に伐採制限を行い、他方わが国では、国産材が売れごろの成長期を迎える。林業に一条の光が差し込みつつある。

P19：口数こそ多くないが、山や森への熱い想いが全身から伝わってくる　P20：山に入ると軽やかに傾斜を駆け上っていった（右上）傾斜での作業は過酷。石などの障害物は当たり前、蜂に刺される被害もある（右下右）　年輪を重ねた木材にも適正価格が付かない（右下左）「きちっと手入れし、大田原の山を後世に引き継いでいきたい」と語る朱里さん。木材が取引される木材共販所にて（左）

祖父の思い受け継ぎ山の世界へ

「地元の山を守りたい」と林業の世界に飛び込んだ女性がいる。大田原市森林組合の齋藤朱里（あかり）さん（二六歳）だ。

日本は一九六四年に木材の輸入を自由化し、国内自給率は三割弱にすぎない。輸入のあおりを受けて、国産木材は費用に見合う価格が付かないため、林業で生計を立てる人が減り山の手入れもままならず、森林が荒れてしまった。

しかし、朱里さんはこの厳しい世界に入ることに迷いがなかったという。イチゴ生産農家に生まれ、好きだった植物を学ぶか、保育士になろうか迷った末、東京農業大学短期大学部に進み、造園について勉強した。授業では日本の森林事情についても学んだ。「人の手が入らず、荒れた森林が増えている」――。足元にある日本の森林問題が頭から離れず、徐々に山について知りたいという意欲が高まった。

朱里さんには祖父、基夫さんがいた。子どもの頃、気付くと基夫さんはのこぎりとはしごを抱えて出掛けていった。そのとき祖父が山で枝打ちや下刈りをしていたと知ったのは短大に入ってからのことだった。こまめに山の管理をする祖父の姿とは裏腹に、日本の森林は荒れつつある。朱里さんは、この状況を見逃すことができなくなった。短大卒業後、宇都宮大学森林科学科に編入し、本格的に森林について学び始めた。

編入前から大田原市森林組合への入組を考えていた。基夫さんに伴われて大学三年の冬に組合長の須藤義朗さんの自宅を訪れ、働きたいとの意思を伝えた。それから数カ月間、何の音沙汰もなかった。須藤さんは「専門職として働きたいという女性は彼女が初めてで、危ない仕事もあるし、トイレの問題など心配の方が先にたった」と振り返る。

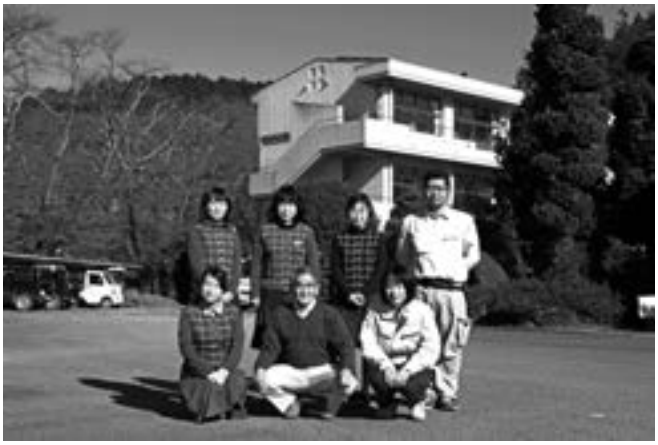
吉報を期待しつつ、並行して就職活動をしていた朱里さんに、ついに採用の連絡があった。程なくして、基夫さんは亡くなった。入組後、朱里さんは基夫さんが手入れしていた山に入った。「ヒノキの枝打ちがしっかりされていて、よくここまでやったなと思いました」。生前、基夫さんと山についてじっくり話す機会はなかったというが、天国でこの言葉を聞いた基夫さんは目を細めているに違いない。

徐々に見えてきた課題

大田原市森林組合が管轄する杉やヒノキなどが植えられた森林は約八〇〇〇ヘクタール。組合は、高齢化や副業などで山の管理ができなくなった組合員に替わって作業を行う。事業課は山に入って植え付けや下刈り、伐採などの作業をする技能職員と、作業計画を立て技能職員に指示をする職員に分けられる。朱里さんは六人いる職員の末っ子だ。補助金の申請など事務所での仕事が多いが、作業をする山とそうでない山の境界を確認したり、測量して作業する面積を確定するために現場にも出向く。「教わるばかりの毎日です」と謙虚に

話すが、勤務してから間もなく三年がたち、課題もしっかり把握している。

それは、山の仕事は収入が不安定である点だ。現場で働く技能職員は雨が降ると仕事がなく、給与体系も日給制で、収入に響く。技能職員には二〇代の若手もいるが、危険な仕事でもあり、離職につながりやすい。



須藤義朗組合長を囲む大田原市森林組合の職員の皆さん（一部）。事務所を預かる女性職員たちも朱里さんを温かくサポートしている

もう一つは、木材の販売だけで生計が成り立たないという根本的な問題。高度経済成長期まで、杉の木を一本売れば、家が一戸建つというほど高い価値があったが、今では四〇年育てた杉が一本一〇〇〇円にもならない、という話を筆者もよく耳にする。組合が間伐材を切り出して販売しても、経費と相殺され、所有者には補助金を足してもわずかな額が還元される程度。植え付けや下刈り作業に至っては、所有者の持ち出しとなる。お金を掛けて手入れをするなら放っておいた方がいいと、ますます山への関心が薄れ、自分の山がどこにあるかも分からない所有者も多い。

朱里さんは課題を嘆くだけではなく、自身で答えを見つけようとしている。「雨の日にもできる仕事をいかに確保するかが大事だと思います」。若手の離職についても「若い担い手を育てていく仕組みを全体でつくっていく必要があります。ベテランの職人からすれば頼りないかもしれませんが、技術を身に付けるまでには時間がかかります。若い人は気力と忍耐力を持つことも大切です」。職人気質が色濃く残る世界にあって、ベテランと若手をどうつなげていくか、朱里さんはその橋渡しをしたいと考えている。

女子力活かし情報発信したい

現在、木材販売は希望の光が差し込んでいるという。大田原市森林組合がコンサルティングを仰いでいる矢島経営経済研究所の矢島洋一さんは「開発途上国を中心に、環境保全のため伐採が制限されている一方で、日本は六〇～七〇年前に植えた『売れごろ』の木材がたくさんある。輸出も含め販路開拓すれば日本の林業は大きく変わる」と言う。矢島さんは技能職員の作業標準書作りや能力評価システムを指導しており、朱里さんも関わっている。さらに朱里さんが力を入れたいことは情報発信だ。大学時代には、同じ学科の女性五人で、「林業女子会@栃木」という組織を立ち上げ、お茶を飲みながら一般の人と森について語る「林（りん）カフェ」などを開催した。林業女子会は京都府で始まり、今では静岡県や岐阜県など全国に組織がある。それだけ林業に魅了された女性が増えている証拠だ。共に活動した四人は林業関係の仕事や研究を続けている。「みんな、森を守ろうという使命感みたいなものを持っています」。森や山の魅力を広く知ってもらう活動にも参加している。「とち木異業種連携女子会」（仮称）のメンバーとして林業関係者や主婦、行政など交えて、今後、現場見学や勉強会を開催し、栃木県の木材のPRをしていく予定である。

木というと家や家具の材料を思い浮かべるが「森は水を蓄えて浄化することから、『緑のダム』と言われます。キノコや木の実、山菜など山の幸もあるし、子どもたちの学習の場所にもなる。森林浴での癒やし効果もあるし、落ち葉は堆肥の原料になります」と目を輝かせて教えてくれた。確かに、山からこれほど恩恵を受けているのに私たちはあまりにも無関心だ。山と私たちの暮らしの関係について情報発信する女性が増えれば、山の活かし方も変わっていくかもしれない。朱里さんは今、植え付けや間伐といった施業の方針を立てたり、事業収支を含めた森林の活かし方を所有者に提案する「森林施業プランナー」を目指し、勉強を続けている。

（青山 浩子／文　河野 千年／撮影）

大田原市森林組合 URL…http://www.jf-ohtawara.or.jp/

Forum Essay
フォーラムエッセイ

パーティーの主役たち

声楽家
西口 彰子

にしぐち あきこ
栃木県出身。東京藝術大学卒業後、2009年に渡米。マネス音楽院修士課程卒業後、ベルリン、ミラノにて活動。ニューヨークやドイツの数々のコンクールで入賞。ドイツ、ジルベスターコンサートでラインラント＝プファルツ州立フィルハーモニー管弦楽団と共演。15年夏より日本でも活躍中。公式HP：http://akiko-nishiguchi.net/

ニューヨーク、ベルリン、ミラノと、歌手として武者修行の六年間、孤独になりがちな海外生活で、私が多くの人と出会えたのはパーティーやディナーでした。

音楽院に通っていたアメリカでは、食べることよりも、話すことが目的のホームパーティーがよく企画されました。基本的に食事はなく、ひたすらお酒を飲み続けながら、相手を変え、話題を変え、夜通し話し続けます。自分以外は全員アメリカ人、なんて時は結構しんどかったのですが、生きた文化や、同世代の人が日ごろ何を考えているのかを知る貴重な機会でした。食事が出る時は「ディナー・パーティー」というお知らせになるようですが、留学当初は「いつお料理が出てくるのだろう」とおなかを空かせていたものです。

ドイツ人にとってビールは欠かせません。ビールは食事の一部ですから自然と料理もビールに合うものになって、ビアガーデンやビアホールで、みんなでワイワイ盛り上がりますが、お家に集まる場合は、家族や親しい友人のみの小規模なディナーが一般的です。というのも、一日の中で主な食事はランチなので、夜は火を通さなくても済む、ハムやチーズをパンに挟むような軽い食事をします。また、コンクールでお世話になったワインの醸造で有名なノイシュタットのご家庭では、ご近所同士でランチやお茶に招待し合ったり、夜はワインバーで待ち合わせて歌いながらお酒を飲んだりと、食事やお酒を通した交流がとても盛んでした。

イタリアでも小規模なディナー・パーティーが主流です。家族のイベントに親戚中が集まって、マンマがフルコースを振る舞う、というのも家族の絆の深いイタリアならではでしょうね。若い世代はピッツェリアに集まって、その後はディスコに行くのが一般的です。

海外に暮らしていると、日本人の食事に対する思い入れの深さに驚きます。「鍋パーティー」や「餃子パーティー」など、食べ物が主役のパーティーが企画され、人が集う時、そこには必ず場を盛り上げてくれるお料理があるのです。

私の中でも、幼い頃からの楽しかった思い出は、いつも食事と結びついています。

日本産・原木乾しいたけをすすめる会
小川 武廣
（八七歳）

●おがわ たけひろ●
一九二八年奈良県生まれ。京都大学農学部林学科卒業。林野庁に二五年間勤務し、その間に農林水産航空協会や群馬県に五年半出向。その後、日本椎茸農業協同組合連合会常務理事、会長を経て、二〇一一年に退職し顧問となる。著書『乾しいたけ千年の歴史をひもとく』『乾しいたけの今日・明日』『続乾しいたけの今日・明日』『蘇れ乾しいたけ』『みどりの世界へようこそ』など。論文「山村・明日への道」「地方創生の視点」「文明の課題」など。

わが国の食生活は長い間、ご飯に一汁一菜か二菜に漬物といった質素なもので、肉や魚、伝統食品など高価な食材を使う料理は盆、正月といった祭事などの「はれの日」のごちそうで普段、口にすることはあまりなかった。

食に変化が出始めるのは、一九五五年以降である。高度経済成長期に入ると生活水準の向上で食の洋風化が始まり、さらに七〇年ごろからファミリーレストランが登場して外食化が広がった。その後、家庭内食は半調理・調理済み食品など簡便化食品が続々と入り込み、すっかり様変わりした。

食のトレンドは「豊食」から「飽食」へ、さらに「崩食」へと進んでいる。こうした中で人間らしい本来の食生活に立ち返ろうという動きも出てきている。

イタリアでは八六年に消費者へ伝統的な食材や味の教育を進めることなどを狙いとした「スローフード」運動が始まり、アメリカでは九八年に健康と持続可能性のある社会生活を重視する「ロハス」が唱えられた。

これらの運動が世界中の共感を生んで広がり、食の崩壊への危機感を募らせていたわが国にも大きな影響を与え、二〇〇五年に「食育基本法」が制定された。国民全体が健全な心身を培い、豊かな人間性を育むための食育を、国を挙げて強く推し進めていこうとしている。

食の洋風化や外食化、簡便化など食生活の変貌は、食材の供給サイドに激震を走らせ、加えて海外から輸入食品が激増したことで、在来食品は大きな打撃を受けている。

米の消費量は五〇年前に比べると半減し、しょうゆやみその消費量も近年、かなり落ちてきている。乾しいたけ、かんぴょう、高野豆腐などの伝統食品はさらに深刻で、消費が大きく減ってしまった。国産野菜の消費も減少傾向で、現在は輸入野菜の消費が増えている。

消費が伸びたのは肉類や乳製品であるが、輸入食品の増加が目覚ましく、生鮮キノコ類もまた大きく

消費者の心を捉えなければ食の明日はない
生産者視点から消費者視点へ

伸びている。しかし、これらの食品も近年、頭打ち傾向にあり、人々の食生活はこれからも変化していくに違いない。

市場には食品が満ちあふれており、輸入食品も増加している。消費者はより取り見取りで、欲しい物しか手に取らず、食品は魅力を失えば、衰退の一途をたどるしかない。主食はまだそれでもなくなることはないが、嗜好食品は姿を消してしまう恐れもある。

今から四〇年も前に、アメリカの経済学者ピーター・ドラッカーはすでに顧客（消費者）中心主義を唱えており、「顧客は誰か」「顧客にとっての価値は何か」を企業経営者に問い掛け、顧客ニーズを深く理解し、それを完璧に満たす製品を生み出すことが最も重要だと指摘すると同時に、企業、また商品はプロダクトアウト・マーケットイン（生産者視点から消費者視点へ）に発想を転換しなければ、時代から取り残される、と説いている。

わが国では、それよりずっと前の江戸中期、近江の麻布商であった中村治兵衛が「買い手良し、世間良し、売り手良し」と「三方良し」を説き、生産者は最後に利益をもらう心掛けが大事である、ということを教えている。

また、パソコンのアップル社を立ち上げ巨万の富を築いたスティーブ・ジョブズは異性の口説き方で名言を残している。

「ライバルが一〇本のバラを贈ったら、君は一五本贈るかい？ そう思った時点で君の負けだよ。ライバルが何をしようが関係ない。彼女が望むことを見極めるのが肝心なのだ」

「顧客にとっての価値」が全てで、それは取りも直さず消費者を引き付ける魅力ということにほかならない。

時代は、食の本来的機能の「栄養・嗜好・保健」を求めており、食品はこれらを踏まえた有形、無形の付加価値化へ全力を尽くさなければ、生き残り自体が難しい。

ＴＰＰ（環太平洋経済連携協定）交渉の合意を受け、国は農業の競争力強化策に「担い手の育成」「農地の集積」「六次化など農産物の付加価値化」を挙げているが、先人の教えを今一度、よくかみしめるべきだろう。

耳よりな話

画期的な閉鎖型苗生産システム

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー
吉岡 宏

農作物の栽培では、昔から「苗半作」「苗七分作」といった言葉があり、苗の出来の良しあしがその後の生育や収量の半分以上を決めるとして、育苗には細心の注意が払われてきました。中でも、茎や葉が伸長しつつ花が咲き実を結ぶトマトなどの果菜類では育苗が難しく、これまでに育苗技術の確立に向けた多くの試験研究が行われました。

果菜類の育苗方法は、古くから行われていた温床を用いた平床育苗から、一九六〇年代にはポリ鉢を用いた鉢育苗へ、さらに八〇年代中頃からは大量育苗が可能なセル育苗へと変わりました。

しかし、育苗技術が向上しても、ハウス内での育苗は苗の生育が季節や気象条件などによって変化し、均質な苗を計画的に生産することはできませんでした。一方で育苗の分業化と購入苗の利用が急速に進み、農家は欲しい時期に生育のそろった苗を求める傾向が強くなってきました。

生育のそろいが良く、時期による苗品質の変動もない、農家が望むときに苗の供給を可能にしたのが「閉鎖型苗生産システム」です。これは千葉大学の古在豊樹先生のグループによって九七年に開発され、その後、太洋興業株式会社の岡部勝美さんたちとの共同研究によって実用化し、二〇〇二年に「苗テラス」の名称で市販されました。

「苗テラス」によるトマトの育苗（写真提供：岡部勝美氏）

この苗生産システムは気密性と断熱性に優れたプレハブ庫内に設けられた多段式の育苗棚にセルトレイ（標準機種では九六枚）を並べ、蛍光灯による均一な光、エアコンと送風装置による温湿度と気流の制御、炭酸ガス施用、底面給水方式による潅水（かんすい）と肥培管理を行うもので、育苗管理の完全自動化が可能になりました。そして、播種（はしゅ）してから一定期間後には均質な苗が、一台当たり約七〇〇〇～二万七〇〇〇本（使用するセルトレイのセル数によって異なる）生産されるようになりました。

これにより、苗半作などといったこれまでの育苗の概念が完全に変わりましたが、大規模に苗を専門に生産している法人、研究機関などを中心に、現在のところ一六〇カ所、三六〇台が導入されているにすぎません。

しかし、わが国における野菜苗の年間需要量は、元神奈川県農業総合研究所長の板木利隆さんの推定によると、野菜全体では二二〇億五〇〇万本、このうち果菜類は一五億六七〇〇万本とされています。

今後、予想される育苗の分業化の一層の進展と農家の規模拡大に伴う購入苗の利用拡大によって、この育苗システムは重要度を増してくるのではないかと思われます。

Profile

よしおか ひろし
1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科（修士課程）修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、㈱農研機構野菜茶業研究所長、㈳日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士（農業部門）。

連載　地域再生への助走

むらづくり　まちづくり　むらづくり　まちづくり　むらづくり　まちづくり
ドットコム .com

農山村の暮らしに学ぶ地域づくりのための人材育成
地域に入る作法学び、卒塾生が歩み出す

愛知県豊田市
「豊森なりわい塾」事務局長
NPO法人 地域の未来・志援センター 理事
中川 恵子

企業、行政、NPOが協働

愛知県豊田市旭地区の農山村を活動フィールドとする「豊森なりわい塾」(以下、なりわい塾)は、「中山間地域の自然資源を活用した新たな事業や暮らしを創出する人材を育成する塾」です。

月一回、土日二日間の講座で集落を歩いたり、住民の話を聞くフィールドワークや講師によるレクチャーを年間通して行っています。受講料は年間二万円としており、現在は、二〇一五年五月から一六年三月までの期間で第五期目を開講中です。第五期の塾生は三一人です。

塾生は、自然や農のある暮らしに触れ、地域の人たちの暮らし方を学ぶことで、貨幣経済が全てではないことなどを理解し自身の考え方や、さらには、働き方を変える人たちもいます。なりわい塾は、多くの塾生の生き方に大きな影響を与えています。

なりわい塾は、二〇〇九年に、世界の大企業であるトヨタ自動車株式会社(以下、トヨタ)と、その本社を置く豊田市、私たちNPO法人地域の未来・志援センターの三者による協働事業としてスタートしたプロジェクトです。

トヨタは社会貢献事業の一つとして社有林を里山として整備し、環境学習などのフィールドとして活用する「トヨタの森」で環境教育をベースにしたセミナーを一九九〇年代より一〇年にわたり実施していました。

そして、そのステージアップを図るために環境活動を支援・実践してきた私たちNPO法人に相談があったのです。

一方、豊田市においては、二〇〇五年に周辺六町村との広域合併により森林面積が市域の七〇%を占める森林都市となり、中山間地域の過疎化、高齢化による森林整備の担い手不足が大きな課題となっていました。この課題に対して、移住定住を進める目的もありました。

トヨタ、豊田市、私たちは手探りの状況で議論を重ね、中山間地域の課題を解決するためにも、農山村やそこで暮らす人々の生活に触れ、地域の自然資源を活用した新しい事業や暮らしを創出するための「人材育成」をしようと方向性が定まりました。

そして、「豊森実行委員会」を立ち上げ、一年の準備期間を経て、〇九年になりわい塾を開講したのです。

集落を歩き地域を知る

現在のなりわい塾のプログラムの内容ですが、前半は「地域を知る、地域に学ぶ」をテーマにしています。地域を知るために、集落や森林を歩いたり、お祭りに参加したり、また後述する「聞き書き」などをするフィールドワークが中心です。

後半は、「暮らし・社会をみつめる」をテーマに、農山村の教育、福祉、医療などについて現場を知る人を講師に招き、お話を聞くなどして学びます。そして、コミュニティーで生きていくことはどう

いうことかを理解します。

これらのことを体験することで、暮らしを創る力（自然の恵みを活かし、地域に寄り添った暮らしがどんなものかに触れる）、地域を支える力（地域に愛着を持ち、地域に溶け込むとはどういうことかを体感する）、なりわいを構想する力（地域の課題やその解決の模索を通して、新たなコミュニティビジネスのヒントを得る）を養い、さらに志を共にする仲間づくりができると考えています。

プログラムの中で、塾生の多くが一番印象に残ったこととして「聞き書き」実習を挙げています。

「聞き書き」は、まず、集落に住むお年寄りにどのように生きてきたかなどを寄り添うように問いながら、話に耳を傾けます。その話を書き起こし、再度お年寄りの家を訪ね、読み上げるというものです。

彼らの人生を浮かび上がらせることで、自分のこれからの生き方に重ね合わせます。

塾生は、お年寄りの話に心を打たれ、精いっぱい聞き書きに取り組みます。さらにお年寄りは労力をかけて自叙伝を作成してもらったことへの感謝の気持ちからか、朗読を聞くうちにこみあげてくるものがあるのか涙ぐまれる方もいます。

人々の心に寄り添う

なりわい塾のプログラムは試行錯誤を繰り返しながらも四、五年目ぐらいから現在のまとまった形へと整理されてきました。

例えば、特定の集落を活動フィールドに決めたフィールドワークは、三年目の第二期から取り入れました。地域に入り、寄り添うことがなければ、地域での生き方を感じることはできないと考えたのです。

高齢化が進み、独り住まいのお年寄りも多く、耕作放棄地や森林荒廃、空き家増加などの課題を抱える人口三〇〇〇人弱で、五自治区がある旭地区を市などと相談した上で、活動フィールドに決めました。

さて、第四期目に活動フィールドを別の自治区に変更しようとしたとき、私たち運営スタッフは、気付かされたことがありました。

なりわい塾のスタッフが、集落の中に入っていくというのは、そんなに簡単なことではありませんでした。自治区の会合に、フィールドとしてお

profile

中川 恵子　なかがわ けいこ

1954年愛知県碧南市生まれ。81年より「中部リサイクル運動市民の会」（名古屋市）に参加、環境問題に取り組む。同会発行の「月刊リサイクルニュース」続く「環境総合誌E's」の編集長を2001年まで務める。現在、同会顧問。また、環境活動への志を支援するNPO「地域の未来・志援センター」（2004年発足）の理事としても携わり、2009年より同会に事務局を置く「豊森なりわい塾」の事務局長として、その活動に従事。

「豊森なりわい塾」

豊田市・トヨタ自動車株式会社・NPO法人地域の未来・志援センターの3者で構成する「豊森実行委員会」が主催する「豊森」の人材育成事業。2009年にスタート。実行委員長は、澁澤寿一氏（NPO法人共存の森ネットワーク理事長／農学博士）。事務局は地域の未来・志援センター。活動フィールドは豊田市農山村地域。他、NPOも含む多様なスタッフメンバー構成でプロジェクトを運営している。

上：グループに分かれ集落を歩く塾生
下：森林をめぐるフィールドワークで林業家に話を聞く

世話になるお願いと挨拶で顔を出したとき、住民の一人から「とよもりって、いったい何だ？　わしらは仕事もしていて、みんな忙しいのに、どんなメリットがあるんだ？」と、とても感情的に言われたことがあります。すでに自治区からも了解は得ているものと思っていたので、一瞬、びっくりしたのですが、その言葉で主旨や企画内容が書いてある紙を住民に渡しただけでは伝わらないことに気付きました。その方は、とても不安に感じていたのでしょう。

この経験から、理解してもらうためには、地域を知り、地域から学びたいと考える私たちのフィールドワークや地域の活動に参加するなど多く交流することが大切だと思いました。

交流などの目に見える形で人々の気持ちの中に落ちていかないと伝わらないことがあるのだと強く感じました。

「プログラムありき」ではなく、実践までのプロセスから見えてくること、そこに関わった塾生たちや周辺関係者が織り成す動きや変化そのものが「豊森なりわい塾」のカタチであり成果となっていきました。

また、運営スタッフも塾生と一緒になって現場体験を積み重ねることで、農山村地域で何が課題になっているのか、放置された森林や農地で何が起こっているのかを理解していきました。現在も、さらなるプログラムの充実を図っており、着実に活動に手応えが出てきたと感じています。

今の働き方に何かモヤモヤし、今後の生き方を模索している人や、農業や農村での暮らし、さらに移住・定住を考え、そのきっかけをつかみたい人など、さまざまな動機で参加する塾生ですが、今までに、二〇～六〇歳代の方々が、なりわい塾を卒塾していきました。

卒塾生は名古屋やその周辺都市、豊田市の方が中心ですが、東京など遠方の方もいらっしゃいます。最近では地域おこし協力隊の人や、トヨタ社員たちの参加も増えています。現行の五期生も含むと一二〇人を超えました。

学んだことが作法につながる

卒塾後は、農山村に移住した人、都市部に住みながら農山村に通う人、転職して薪ビジネスなど自然資源を活かした仕事を始めた人、故郷の地域づくりに目を向け始めた人、農業を目指す人などさまざまです。

例えば、第三期の卒塾生たちは、その時にフィールドとして通った旭地区の惣田町（世帯数二一）で、卒塾後も「惣田お助け隊」と称して、畑を耕したり、お祭りやイベントなどを手伝ったりと集落の人たちとの交流を続けています。

トヨタ社員のFさんは、受講中に参加したあるイベントで、チェーンソーでの間伐を体験。その面白さに目覚め、卒塾後すぐ森林学校に通い、初級間伐講座を受講し、その後、仲間を募って間伐ボランティアチームを結成しました。顔なじみの惣田町で、ある山主さんの許可を得て、間伐を手掛けました。

実践の場にもなり、集落の人々も喜び、地域のためにもなる。このような目に見える地域貢献の動きが集落の人たちにも影響を与えていくと考えます。

第四期の卒塾生たちは、旭地区の隣の伊熊町（世帯数二九）で耕作放棄地を借り、「伊熊隊農園」と名付け、数人が毎週のように通って農作業を始めています。この農園は卒塾間近に「田畑をやりたい」という塾生たちの申し出に、当時の町内会長に相談し、塾生たちと集落の人たちとの顔合わせの場を設定していただき、実現しました。

この集落には、最近、町外から空き家に移り住んだ人たちもいて、その人たちとも連携して、草刈りや祭りの手伝い、神社のお掃除など、集落のお手伝いもしながら、自分たちの農園づくりをしています。

伊熊町では「とよもりってなんだ？」から「あ、とよもりさんね」というように地域の人たちの反応が変わってきたのを感じます。それは、卒塾生の活躍の成果によってもたらされた、とてもうれしい変化です。

行政は、農山村の過疎化や高齢化の課題に対して、移住定住を進めています。しかし、そこに住んでいる人たちのことを考えずに、ただ自然の中でのんびり過ごしたいなどと、自分たちのことだけ考えて移住しても、うまくいかないのではないでしょうか。

なりわい塾で学んだことが、「地域に入る作法」につながっていると感じます。

数カ月前、ギャザリングと称し、期を越えての卒塾生の集まりを持ちました。卒塾生の約半数である五〇人が参加し、近況を報告し合いました。なりわい塾の財産は「人」。春、第六期が始まりますが、その成果をどう活かしていくのかが、今後のテーマです。

書評

『小農救国論』

山下 惣一 著

（創森社・1,500円 税抜）

思想化への執念

宇根 豊（百姓）

山下惣一は日本の農業論壇を長く、百姓の側からリードしてきた。その筆鋒は衰えをみせないが、最近では書き方に微妙な変化が見られる。

これまでの内からのまなざしを、外からの言葉・見方を入れながら、意識的に「思想化」しようとしている。まさに最期の表現に賭けている観がある。内からのまなざしである「外国から乾草を輸入している大型畜舎のまわりの田んぼでは、畦草に除草剤をかけて枯らしている」という表現を、思想化すると「部分の効率化、合理化が全体の不合理化を招くことは、農業では珍しくはない」という言説になる。後者の表現が、この本ではたしかに増えている。

さて山下は「小農」を、「暮らしを目的として営む農業」と定義し、「規模は大きくても小さくても、目的は暮らしていくということです。家族農業です。逆にどんなに規模が小さくても、利潤追求を目的としたものは大農です」と言い切っている。

また「家族農業が儲からない根本的な原因は、利潤追求を目的としていないからである。そもそも農業に儲けはない。私たちが農産物と引き換えに得ているのは『対価』である。これは『儲け』ではない」とも言っている。これまでの日本農学の定義とは異なり、山下流の思想化が深く行われていることに感嘆する。

それにしても、天下国家からの見方を一貫して否定し、「日本農業などはどこにもない。あるのはわが村の農業だ」と言ってきた山下が、「救国」などという書名をつけるとは、いったいどうしたことなのだ、と思った。

「敗戦のとき、この国は一回滅びて、それを救ったのが農業と農山村だったということは、忘れないほうがいい。農山村を滅ぼすことは、帰る場所を失うことだが、誰もそういうことを考えないから、自分だけでも守ろうと思う」

山下のナショナリズムはパトリオティズム（愛郷心）を土台としている。ところが国民国家の方はそうは考えない。パトリ（在所）は国家の一部に過ぎないのだ。それでも村の百姓のパトリオティズムがないとナショナリズムも崩壊するぞ、という叫びが「救国」なのである。

しかし、それはやはり哀しい。「自分だけでも守ろう」とするしかないからだ。山下の「救国」ナショナリズムは、それでいいんだ、と断言する気概に満ちているから、よけいに哀しい。

読まれてます

三省堂書店農林水産省売店（2015年12月1日～12月28日・税抜）

	タイトル	著者	出版社	定価
1	月刊コロンブス 2015年12月号「土地改良」で「強い農業」		東方通信社	648円
2	月刊時評 2015年12月号 “闘う土地改良” で農業の未来を整備する		時評社	600円
3	週刊東洋経済 2015年12月12日号 TPPで激変する日本の食		東洋経済新報社	638円
4	減反廃止 農政大転換の誤解と真実	荒幡 克己/著	日本経済新聞出版社	2,600円
5	日本のTPP交渉参加の真実 その政策過程の解明	作山 巧/著	文眞堂	2,800円
6	乱獲 漁業資源の今とこれから	レイ・ヒルボーン、ウルライク・ヒルボーン/著	東海大学出版部	2,900円
7	島耕作の農業論	弘兼 憲史/著	光文社	740円
8	JAが変われば日本の農業は強くなる	杉浦 宣彦/著	ディスカヴァー・トゥエンティワン	1,000円
9	いま問われる農業戦略 規制・TPP・海外展開	長命 洋佑、川崎 訓昭、長谷 祐、小田 滋晃、吉田 誠、坂上 隆、岡本 重明、清水 三雄、清水 俊英/著	ミネルヴァ書房	3,000円
10	亡国の農協改革 日本の食料安保の解体を許すな	三橋 貴明/著	飛鳥新社	1,389円

名古屋市内で東海ブロックの交流会を開催

一一月一〇日、農業者や食品企業などの交流会「フードネットIN名古屋」を開催し、静岡、岐阜、名古屋、津の各支店のお客さま総勢一〇〇人にご参加いただきました。

株式会社タニタ前代表取締役社長の谷田大輔氏より、「社員食堂を作った体脂肪計タニタの経営」と題して、赤字で引き継いだ会社を体脂肪計シェアで世界一に導いたご自身の経験についてご講演いただきました。懇親会では、農業者と食品企業など異業種間での情報交換も図られ、参加者からは「毎年発見があり楽しみです」との感想をいただきました。（東海北陸地区統轄）

経営マインドについて語る谷田氏

マイナンバーをテーマに三事業合同交流会を開催

一一月一六日、水戸市内で日本公庫三事業のお客さまの相互交流を図ることを目的に交流会を開催し、お客さまや関係機関の皆さま六五人にご参加いただきました。

関東信越税理士会茨城県支部連合会専務理事の小泉達哉氏を講師に迎え、「これで安心 マイナンバー実務対応セミナー」と題して、マイナンバー制度の概要や注意点などについてご講演いただきました。参加者からは「マイナンバーというタイムリーなテーマで興味深い講演でした」「今後実務を行う上で注意すべき点が理解できました」などの感想が寄せられました。（水戸支店）

参加者は講演に熱心に耳を傾けていました

「広島発！企業の街コン」を開催

一一月一九日、支店にて広島県内の六次産業化に取り組む方々を応援するイベントを開催しました。

農業者や食品加工業者一〇社が開発した新商品を広島商工会議所や公庫の職員など約四〇人が消費者目線で試食し意見交換を行いました。併せて、東京の広島ブランドショップや宮島の旅館業者のバイヤーとのマッチングを実施。この様子はNHKや地元テレビ局でも放映されるなど注目されました。参加者からは「今後の商品開発に活かしたい」「出展者同士の交流もでき大変有意義」との感想をいただきました。（広島支店）

新商品の感想を述べるバイヤーや職員たち

近畿管内の林業関係者による友の会を開催

一二月七日、「公庫林業資金友の会」を開催し、近畿管内の林業関係のお客さまや関係機関を含めた三一人にご参加いただきました。

滋賀県の株式会社自然産業研究所の中尾友一氏と和歌山県の株式会社井硲（いさこ）林産社長の井硲啓次氏に、林業機械開発の現状や架線集材機開発の経験などをご講演いただきました。今年は友の会幹事による木質バイオマス発電所の現地研修（八月実施）報告を併せて行いました。参加者からは「林業の現場で役立つ架線集材などの有益な情報を得られました」との感想をいただきました。（京都支店）

林業機械開発の現状に聞き入る参加者

衛生・品質管理向上をお考えの食品製造・加工業者の皆さまへ

将来的なHACCP導入義務化に備え HACCP資金をご活用ください

食品の安全性の向上と品質管理の徹底を図るため、製造・加工の工程管理システムであるHACCPの重要性がより一層増しています。EU、米国をはじめ、HACCPの考え方による衛生管理が国際的にも主流となってきており、輸出促進の観点からも対応が求められています。

日本公庫はHACCP支援法に基づく制度資金「食品産業品質管理高度化促進資金（通称:HACCP資金）」により、HACCP導入などの取り組みを支援しています。HACCP導入を図る施設整備のほか、その導入の前段階における衛生・品質管理などのための施設および体制整備など、130以上の事業にご利用いただいています。ぜひ最寄りの支店までお気軽にご相談ください。

■HACCP資金のご融資イメージ

HACCP支援法に基づく指定認定機関
【高度化計画または高度化基盤整備計画の認定】

↓

食品事業者
【施設・設備の整備】

事例
- HACCPを導入した新工場の建設
- 衛生管理の向上を図るための既存工場の改修
- 野菜洗浄施設の導入　など

↑

日本公庫農林水産事業
【HACCP資金の融資】

■HACCP資金の概要

ご利用いただける方	食品の製造・加工の事業を行う中小企業者（製造業の場合、資本金3億円以下または常時従業員数300人以下）
資金の使いみち	HACCPを導入するための施設整備（製造過程の管理の高度化）、またはHACCP導入の前段階における衛生・品質管理などのための施設および体制整備（高度化基盤整備）、もしくはこれらと併せて一体的に導入する生産施設
融資限度額	事業費の80%以内または20億円のいずれか低い額
返済期間	10年超15年以内（うち据置期間3年以内）
金利（1月21日現在）	2億7,000万円以下　0.35～0.45% 2億7,000万円超および特定の事業　0.50～0.60%
ご留意いただきたい事項	1　HACCP支援法に基づく各指定認定機関の認定対象の食品の種類は以下の通りです。 食肉製品（ハム・ソーセージなど）、容器包装詰常温流通食品（缶詰、瓶詰、レトルト食品）、炊飯製品、水産加工品、乳製品、味噌、醤油製品、冷凍食品、集団給食用食品、惣菜、弁当、カット野菜、食用加工油脂、ドレッシング、清涼飲料水、食酢製品、ソース、菓子、乾麺、漬物、生麺、パン、食肉（枝肉・部分肉、と畜） 2　審査の結果により、ご希望に沿えない場合がございます。 3　上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル（0120−154−505）または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問い合わせください。

みんなの広場

♠一二月号特集「インバウンド、農への条件」は、外国人観光客をアイデア次第で東京、京都、大阪などのゴールデンルートだけでなく、地方にも取り込むことができる事例が紹介されており、この取り組みは地方自治体も大いに参考になるのではないかと思いました。

有名な観光地を特に持たなくても、日本の日常生活が体験できる農家民宿で、テーマやストーリー性を持った取り組みを実際に外国人が体験して帰国すれば、口コミで情報が広がります。山形県飯豊町や鹿児島県などはすでに実践しており、交通が少し不便でも、その土地の魅力があれば、農村でも人は集まるのです。要は、知恵を出し、汗をかいて、本気で取り組む人がいる地域が成功することを教えてくれました。

（広島市　亘 幸男）

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

［郵送およびFAX先］
〒一〇〇-〇〇〇四
東京都千代田区大手町一-九-四
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX　〇三-三二七〇-二三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

①日本公庫の独自調査（農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など）結果
②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ（http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html）にアクセスしてご登録ください。

（情報企画部）

編集後記

♠映画「WOOD JOB!」の原作、三浦しをん氏の「神去なあなあ日常」は、都会の若者が親にだまされて林業に従事し成長する痛快な小説。物語の世界だけではなく林業の現場では、雇用や自伐などで、これまでになく若い人が入っている現象があるとのこと。定着の問題があるにせよ力強く感じます。（嶋貫）

♠木漏れ日を浴びてほほ笑む「農と食の邂逅」の齋藤さん。今は「林業女子」とすてきな呼称があるようですが、その仕事はやはり女性にとっては厳しいものなのでしょう。森林浴でリフレッシュなどと甘い考えでは入り込めないものを感じます。おじいさんは、そんな山の厳しさを言葉少なに齋藤さんの心の中に植え付けていったのでしょうか。（小形）

♠「焦土と化した戦後日本の山野に祖先が残してくれた宝」という酒井さんの言葉。スギの学名「Cryptomeria japonica（クリプトメリア ジャポニカ）」も「日本の隠れた財産」と訳せる、と本で読んだことがあったので、大変な感動を覚えました。身近とは言えない森林ですが、足を運び作業の手伝いをして日本の宝を感じてみたいです。（城間）

♠「変革は人にあり」で丸和林業株式会社の北岡幸一社長が、韓国ではヒノキがブームで、建築建材として使われるとおっしゃっていました。日本産ヒノキは香りが強く、特に人気が高いとか。ヒノキの魅力の一つである、あの独特の香りが私も好きです。温泉旅館のヒノキ風呂に入ったら、本当に癒やされますね。（林田）

AFC Forum フォーラム

■編集
大本 浩一郎　嶋貫 伸二　清村 真仁
飯田 晋平　小形 正枝　城間 綾子
林田 せりか

■編集協力
青木 宏高　牧野 義司

■発行
（株）日本政策金融公庫　農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail　anjoho@jfc.go.jp
ホームページ　http://www.jfc.go.jp/

■印刷　凸版印刷株式会社

■販売
（一財）農林統計協会
〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail　publish@aafs.or.jp
ホームページ　http://www.aafs.or.jp/

■定価　514円（税込）

♠ご意見、ご提案をお待ちしております。
♠巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食
をつなぎます。
第9回アグリフードEXPO大阪2016
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会
日時
2月18日(木)/19日(金)
10:00～17:00 10:00～16:00
主催
JFC 日本政策金融公庫
会場
ATC アジア太平洋トレードセンター
食べて応援しよう!

AFC Forum フォーラム
2016 2
特集
森林・林業の新時代が来る

●次代に継ぐ

『ふるさとのみかん畑』野角 咲菜　香川県高松市香川大学教育学部附属高松小学校

■AFCフォーラム　平成28年2月1日発行（毎月1回1日発行）第63巻11号（786号）
■発行／（株）日本政策金融公庫 農林水産事業本部　〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4　Tel.03（3270）2268
■販売／一般財団法人 農林統計協会　〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13　Tel.03（3492）2987　■定価514円　本体価格476円

FSC www.fsc.org
ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C014687

JFC 日本政策金融公庫 農林水産事業本部
http://www.jfc.go.jp/